土屋文明を書く　出品目録　郷土の近代短歌シリーズ　10.

歌人・土屋文明(一八九〇～一九九〇)芸術院会員。万葉集の研究家と知られ詠まれた背景を探るため全国各地を訪れている。清水には昭和十七年一月、山部赤人の歌「田子の浦ゆうちいでて見れば真白にぞ不尽の高嶺に雪はふりける」の調査のため清水駅から燃料不足の時代、今では見られない薪自動車で興津、薩埵辺りから岩淵まで「不尽の高嶺と田子の浦」の考察をしている。以後、徒歩でも調査。その時の模様は万葉紀行に記述。静岡にはアララギの歌会に度々、来静。静岡県アララギ月刊創刊号(昭和二一年六月)に短歌を寄せるなど関係が深い。土屋文明全歌集(池田書房(平成一〇年)より本県中部関係を挙げてみると静岡アララギ歌会、四首(静岡県アララギ月刊創刊号　昭和二一年六月)。丸子吐月峯、五首(自流泉　昭和二五年)。茶の実、三首(静岡アララギ　昭和二七年一月)。花柚、静岡柑橘試験場、五首(静岡県アララギ　昭和二七年一月)。静岡一宿　五首(昭和三三年十二月)静岡県アララギ月刊三〇〇号に　一首(静岡県アララギ　昭和四六年五月)。静岡県アララギ月刊四〇〇号　三首(昭和五四年九月)。静岡県アララギ月刊五〇〇号　三首(昭和六三年一月)。合せて二六首。本展ではこのうち十三首を変体仮名を使わなく書き、軸、額装にして展示。その他　漢字　かな小字作品など二〇点、書作品十七名三十三点、はがき絵、墨彩画十四名　二三点　併せて五六点出陳。

▲テーマ作品

楠若葉雨の一日を相こもり談るもたのし古き友新しき友　昭和二一年六月
顧みる人なき滝の水芥子拾ひ来て言ふ吾が寒き山のさま　〃
十年ならずふたたび亡びし町なるを友恙なく来り集る　〃
春草は竹の林にのび立ち未だ朝露のしとしととせりて　昭和二五年
椎の花峰〃に白き麓に来吾は汗ふく寒き谷に住みき　〃
宇津の山越えて下れば昨日入りし柴屋寺の道草は高しも　〃
行きめぐるたちばなの園わが恋ふるアベタチバナはありもあらずも　昭和二七年三月
めぐりあひ会ふが如しもヘンルーダしどろなる葉の香をかぐ時に　〃
こもり居る吾が手の中にかぐわしも昨日拾ひし花柚二つ　昭和二七年一月　廣住翠豊
花柚の落ちしを拾ふ一つ二つ物ほしき老かくすことなし　〃
ねたみなき老のすさびに集め持つユーカリ浜ゆふ花柚の種子　〃
幾年になりぬやしぬらむ東照宮回廊の小さき歌会忘れず　昭和五四年九月
乏しきを守りて人々受けつぐに清くあかるき交はり思うはゆ　〃　広住花岳

▲テーマ外作品

空山獨夜　軸　臨趙之謙　氾勝之書　額
臨木簡　額　臨造像記　帖
秋のくれ　軸　はるがずみ　帖
恋ふるとき　額　海の原　帖
臨高野切二種　帖　吉野帖　帖
春霞　額　夏衣　帖　広住花岳
草枕　額　やまどり　帖
臨郭店楚墓竹簡　帖　〃　天津風　桐箱
「慈」による　額　広住花岳　田子の浦　桐箱　広住花岳
ちぎりおきし　桐箱　石川啄木の歌　軸　広住花岳

▲墨彩画、はがき絵　一四名　二三点出陳

*参考資料　・土屋文明全歌集　石川書房　一九九三年　・万葉紀行、・静岡県アララギ月刊他